

**2020年度
八戸学院大学 看護学科
推薦入学試験（Ⅱ期）
編入学試験（Ⅰ期）**

小 論 文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かない。
- 2 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用する。
- 3 問題冊子に印刷不鮮明、ページの落丁などがあるときは、手を挙げて監督者に伝える。
- 4 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。

以下の文を読み、問いに答えなさい。

HPVワクチンの「意義・効果知らない」約4割 勧奨中止の影響拡大か

子宮頸（けい）がん予防の「ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン」について、定期接種の対象である12～16歳の女子の約4割が「意義や効果を知らない」と回答していたことが30日、厚生労働省の調査で分かった。国が平成25年6月に接種の積極的勧奨を中止してから6年が過ぎ、認知度への影響が拡大している実態が浮き彫りとなった。

厚労省は昨年1月、HPVワクチンの理解を深めるため、有効性や「副反応」が疑われる健康被害の症状などを記したリーフレットの改訂版を公表。調査はこれらの認知度や理解度を調べる目的で、同10月、全国の12～69歳の男女約2700人から回答を得た。

この結果、8割以上がリーフレットを「見たことはない」と回答。ワクチンの意義・効果について、12～16歳女子の38・8%が、その母親の16・2%が「知らない、聞いたこともない」と答えた。

ワクチン接種について、対象女子の母親の考えで最多だったのは「決めかねている」の38・4%。「今後検討したい」（15・5%）、「今後も接種をする予定はない」（15・3%）と続いた。「接種をした」は2・7%だった。

厚労省は「ワクチンの接種対象者やその保護者に対し、より確実に情報を届ける方法を検討する必要がある」としている。

■情報得られる環境作って

子宮頸がんになるのは怖いけど、健康被害も心配…。HPVワクチン接種の判断が個人に委ねられている中、対象年齢の女子を抱える保護者が困惑を深めている。接種を決断するために、行政や医師らから、必要な情報を得られる環境づくりを求める声もある。

埼玉県熊谷市の看護助手の女性（45）は、高校2年の長女（17）にHPVワクチンを接種させるべきかを決められないまま、定期接種の時期を過ぎてしまった。対象が12～16歳の女子であることは知っていたが、女性は「健康被害への不安を拭いきれなかった」と明かす。

神奈川県藤沢市の主婦（61）も、長女（15）への接種を悩み続けてきた。長女は今年高校1年となり、公費負担の定期接種を受けられるのは今年度までだ。自治体からは個別の接種案内が届かず、厚生労働省作成のワクチンに関するリーフレットも説明内容が複雑で、どう解釈していいか分からなかった。

そんな中、情報提供をしてくれたのが、産婦人科専門医で「藤沢女性のクリニックもんま」の門間美佳院長だった。ワクチンの有効性や起こりうる症状などについて、丁寧な説明を受ける機会を得た。

長女と話し合った上で、ワクチンを接種させることを決断した主婦は「接種しないことで、子宮頸がんになってしまうことの方が怖いと感じた。必要な情報を得た上で、結論を出せる環境があることは重要」と話した。

2019.8.30 19:53 産経ニュース ライフ／からだ

問題 1 HPV ワクチン接種の積極的な勧奨が中止されてから 6 年が経過していますが、HPV ワクチン接種の是非についてあなたの考えを 600 字以上 800 字未満で述べなさい。